

月刊

2012

1
月号

みんぱく

辰 特集

きれいなだけのアイドルなんて！ 菅瀬 晶子
聖なる竜の復活 河西 瑛里子
龍に出会う街・香港 辻本 香子
龍女のため息 君島 久子
弥生時代にきた龍 金関 恕
龍と気候変動 安田 喜憲
歌舞伎十八番『鳴神』と竜神 古井戸 秀夫

大阪の都心再生に深く関わっている。とりわけ強い意志を持って、府や市の担当者とともに、河川空間の美観の創出に取り組んできた。

気候の良い時期に、ぜひ中之島公園に向いて欲しい。薔薇や桜が咲き誇る両岸に、水際に席を用意した洒落たレストランが増えたことに気がつくだろう。船着き場も増えた。夜にはLED照明で、堤防や橋梁が美しく照射されている。幸運であれば、民間企業の社会貢献による巨大なアヒルのアートに出会うことができるかも知れない。

「汚い」と自虐的に評価するほかなかった大阪の水辺に、かつてない美観が生まれている。ホームレスのブルーテントが川沿いを占拠していた数年前を思えば、見違えるはずだ。

この試みで私が重視したのは、都市基盤を再整備すると同時に、都市の物語を再生させる作業である。

かつて大阪はバリにたとえられた。水路が市街地を縦横に貫き、都心に象徴的な中洲と丘がある地勢に、そこを訪問した外国人たちが「華の都」との近似を見てとった。さらに明治三〇年代になって、大阪は「東洋のベニス」、すなわち「水の都」という冠を手にいれる。

この時、人々は過去に遡って「物語」を描き直した。近江・山城・丹波・大和など諸国の水を集めて海に注ぐ難波の地には、飛鳥や奈良の都の外港が置か

プロフィール
1960年大阪生まれ。京都大学工学部建築学科卒・大阪大学大学院工学研究科博士課程修了、建築史・都市文化論専攻。工学博士。大阪府立大学21世紀科学産学機構教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長。各地で市民参加型のまちづくりや地域ブランド創出を实践、都市に関する著作は数十冊。イベント学会副会長、大阪府文化振興会議会長などを兼務。



水の都 都市の「物語」を描き直す

橋爪 紳也

れる。大陸への使節も、この地から旅だった。やがて「徳川の平和」のもと、幾筋もの掘割を抜いて水を排し、湿地は商人たちが住む城下へと変貌を遂げる。水路を動脈として発展した都市は「天下の台所」と呼ばれる繁栄をみた。道頓堀の芝居茶屋街、淀川舟運や琴平参詣の客で賑わう旅館群、天保山などの行楽地など、運河沿いに独特の名所が点在した。そのすべてが「水の都」の物語に収斂する。

大阪は、西欧諸都市との比較のうえで、他律的に「水の都」という尊称を得た。しかし人々は、はるか古代にまで遡る風物や生業を、我が街の固有性に読み替える。結果、西欧諸都市の模倣ではない、独自の「水の都」の物語を描き直した。

しかし戦後の高度経済成長にあつて、汚染した水路に背を向けた大阪は「水の都」という美称を失う。市民の意識も生活も水辺と疎遠となり、結果として、かつての都市の物語や市民の誇りも忘れ去られた。

ようやく、新たな「水の都」の物語を描き直す時期が到来した。この数年、私が実践している美観の整備は、単なるハードの拡充ではない。あまりにも自虐的なわが街の語りを脱し、都市のブランド力を再生するとともに、シビック・プライド——すなわち「市民の誇り」を蘇生させる試みでもある。

月刊
みんな
1月号目次

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
水の都 都市の「物語」を描き直す 橋爪 紳也 | 12 | みんなく Information |
| 2 | 特集 辰
きれいなだけのアイドルなんて！
——聖ゲオルギオスの竜退治 菅瀬 晶子 | 14 | 地球ミュージアム紀行
グアテマラ——虐殺の記憶とコミュニティ再生の拠点
ラピナル・アチ・コミュニティ・ミュージアム
関 雄二 |
| 4 | 聖なる竜の復活
——女神・魔女復興運動とケルト文化 河西 瑛里子 | 15 | みんなく私の逸品
竜骨車
久保 正敏 |
| 6 | 龍女のため息 君島 久子 | 16 | 散策と思索の径
蠟人形は答えず
野林 厚志 |
| 7 | 弥生時代にきた龍 金関 恕 | 18 | 多文化をあきなう
商いが文化を育てる
鈴木 紀 |
| 8 | 龍と気候変動 安田 喜憲 | 20 | 歳時世相篇
新年が年に4回やってくる
関本 照夫 |
| 9 | 歌舞伎十八番『鳴神』と竜神 古井戸 秀夫 | 22 | フィールドで考える
大衆の所在——「真正なエジプト人」とは
相島 葉月 |
| 10 | 研究フォーラム
「梅棹アーカイブズ」の活用に向けて
堀田 あゆみ | 24 | 次号予告・編集後記 |



集物

千支のなかで唯一の想像上の動物、それが辰——竜・龍である。おそらくは農耕が広まるとともに、水を司る霊獣として生まれた辰は、さまざまな姿で描かれるようになった。あるときは雄々しく天空を舞い、あるときはたおやかなる龍女となつて、若者を水底の宮へといざなう。またあるときは毒を吐く悪の化身として退治され、現代においては大地母神としてよみがえりつつある。そんな変幻自在な辰の物語を、世界各地から集めてみた。



玩具(龍頭船) H0011956

きれいなだけのアイドルなんて！

—聖ゲオルギオスの竜退治

菅瀬 晶子 民俗民族社会研究部

悪の権化と聖なる存在

ヤマタノオロチにキングギドラ、それに聖ゲオルギオスや大天使ミカエルに退治される竜。世界的に、竜といえば悪者と相場が決まっている。しかし、日本人であるわれわれは知っている。竜は東アジアではしばしば水神として祀られ、古くか

ら皇帝の象徴とみなされてきた聖なる存在であることを。

キリスト教文明の源流である東地中海世界でも、「聖なる竜」の名残は見えてとれる。たとえば、竜退治の聖人として有名な聖ゲオルギオス。アラビア語のシリア方言でマール・ジルジスとよばれ、パ



シリア・アレppoのメルキト派カトリック大司教座にて。この竜は、マール・ジルジス(ゲオルギオス)の馬の尻に喰らいつき、必死の抵抗をこらえている

レスチナの血をひくとされる彼への崇敬は篤く、キリスト教徒のみならず、ムスリムまでもが彼の霊力にあやかるうと、その聖所に額づく。彼がイスラームの神秘的存在、「緑の男」ことアル・ヒドゥルと同一視されているためだ。ゲオルギオスのアイコンやレリーフに灯明を捧げ、人びとは一心に祈る。ことに病の治癒や子宝祈願、雨乞いには絶大な力を発揮するという。農耕のさかんな東地中海世界において、もっとも身近で重要な豊穡の聖者。それがゲオルギオスである。

どちらが本物の豊穡神？

ところがこのゲオルギオスのアイコンをみていて、ふと思うことがある。人びとはじつのところ、どちらに祈っているのだろうか。ゲオルギオスか、竜か。それとも両方？

じつはゲオルギオスの正体は、古代カナアンの豊穡神パールが、一神教にとり込まれた姿であるといわれている。しかも、このパール自体、年上のきょうだいから豊穡神の役割を奪った神なのである。シリア西部のラース・アッ・シヤムラ遺跡から出土したカナアン神話の書、ウガリト文書によれば、彼は兄、あるいは姉であるヤムを倒して王座に就くのだが、このヤムは竜の姿をしていたという。東地中海世界では一年が雨季と乾季に大別され、人びとは雨季のさかりを「もっとも美しい季節」とよぶが、雨は降りすぎればときに水害を引き起こす。ヤムは荒ぶる豊穡神として敬愛され、同時に畏れられていたはずだ。そのヤムを征服した者が、この地のあらたな王となる。ゲオルギオスのアイコンに隠されているのは、古代東地中海世界における、豊穡神の変遷だ。



シリア・サイドナーヤのマール・ジルジス祭で登場した、はりぼての竜。後方にゲオルギオス役の生徒の姿がみえる

純粋にゲオルギオスを崇敬したいのであれば、彼のみを描いたアイコンを用意すれば事足りる。若くして殉教したゲオルギオスの像は、信徒を礼拝に誘う、美形のアイドルとしてはおあつらえむきだ。しかしながら、彼が単体で描かれているアイコンはすくなく、ほとんどの場合は竜を殺す、血なまぐさい姿である。しかも、アイコン作家たちは竜の描写に手を抜くことはしない。ゲオルギオスの馬の尻に喰らいつくほど獠猛にしてみたり、逆にひょうきんな姿に描いてみたり、むしろ型が決まっているゲオルギオスよりも、自由に愉しんで描いているようにすら思えるのである。

パールに殺されたヤムのことなど、人びとはすっかり忘れ去ってしまっている。しかしながら、彼

らは殺される竜の姿に遠い祖先の記憶を呼び覚まされ、そこに豊穡神の真の姿をみているのかもしれない。そのことをはじめて意識したのは一九九七年五月六日、シリアのサイドナーヤでみた、マール・ジルジス祭でのことである。

敵役は人気者

サイドナーヤは聖母マリア崇敬の町として有名であるが、町の入り口にあるマール・ジルジス聖堂は、シリアにおけるゲオルギオス崇敬の拠点のひとつである。祭の当日、村の内外から集まった人びとで聖堂は埋め尽くされ、聖体礼儀(ミサ)の後には、地元の高校生たちによって、竜退治物語の寸劇が上演された。

ゲオルギオス役の生徒は赤いマントを翻してはいるが、肝心の衣装はジーンズを緑のブルーで染めただけで、安っぽい印象は否めない。いっぽう、敵役のはずの竜のはりぼては、かなり大きな力作だった。寸劇はもちろん、ゲオルギオスが竜にとどめをさしてクライマックスを迎えたのだが、興味深いのはその後の光景である。ゲオルギオス役の生徒が子どもを抱きあげ、記念撮影をする横で、竜もまた子どもたちに大人気だったのだ。彼らはわれ先にと竜に手をのべ、撫でさすり、果ては竜の口に頭を差し入れてはしゃいでいる。はりぼてのなかに入った生徒も心えたもので、泣かせない程度に子どもを驚かせ、竜の周りには笑いの輪が広がっていた。

——きれいなだけのアイドルなんて、つまらないじゃないか。ちよつととぼけた竜のはりぼてが、得意げにニヤツと笑ったようにみえたのは、気のせいだろうか。

聖なる竜の復活

—女神・魔女復興運動とケルト文化

河西 瑛里子 民博 外来研究員 日本学術振興会特別研究員

ハリ・ポッター・シリーズ第四巻のクライマックスのひとつに、主人公らが猛竜に立ち向かう場面がある。この場面に代表されるように、ヨーロッパにおける竜は、邪悪さの象徴として、忌み嫌われてきたように考えられている。

ケルト文化の守護神

とはいえ、イギリスでもむかしから竜が悪の化身とみなされていたわけではない。サクソン人が侵入する前からグレート・ブリテン島に暮らしていたケルト系の人びとにとって、竜は守護神的な存在だった。たとえば、ケルト伝説の英雄アーサー王の姓、ペンドラゴンは「竜王」を意味しており、現在でもケルト文化が色濃く残るとされるウェールズの国旗や、アーサー王ゆかりの地が多く残るサマーセット州のシンボルには、赤い竜が用いられている。しかしながら、竜を悪魔とみなしたキリスト教の布教により、イギリスでも竜は邪悪な存在となっていく。竜退治で知られる聖

ゲオルギオスを、イングランドの守護聖人に制定したことは、そのひとつのあらわれといえよう。

虐げられた竜の再評価

ところが近年、既存の価値観に当てはまらない生き方を求める人びとのあいだで、竜を再評価する動きが出てきた。その代表的な例が、女神・魔女復興運動に携わる女性たちである。一九六〇年代にアメリカで始まったフェミニズム運動では、女性の社会的地位の向上だけでなく、女性のための精神的な拠り所の創造も試みられた。欧米で主要な宗教であるキリスト教は、「神」が男性形であらわされたり、高位の司祭職に男性しかつけないなど、男性的すぎて、女性の精神的支柱にはなりえないと考えられたのである。

そんな彼女たちにとって、ヨーロッパにかつてあったが、キリスト教に抑圧されたとされる、魔女術や地母神信仰は、女性のための信仰としてふさわしいように思えた。そこで、世界各地の神話や伝説をとり入れながら、魔女や女神をシンボルとする、新しい信仰を創り出していったのである。このような流れのなかで、キリスト教に敵視されてきた竜も、キリスト教に抑圧されてきた女性や地母神の象徴として、積極的に評価されることになったのだ。

このような傾向は、ニューエイジに関心をもつ人びと一般のあいだに広まりつつある。竜の図柄はタトゥーのデザインとして人気があるし、竜を大地や自然の象徴とみなし、そのエネルギーをヒーリングに利用する者もいる。

長い苦難のときを経て、イギリスでは今、聖なる竜が復活しつつあるのだ。



ケルト暦の春の祝祭ヘルテンのひとま。赤い竜は火を白い竜は水をあらわし、赤い竜が白い竜を倒すことで、暖かい季節になることを象徴的に示している。なお、このパフォーマンスの創作はイギリス人によっておこなわれていて、内容は毎年異なっているのだが、この年のものは中国の龍舞の影響を受けていた(2010年5月1日、サマーセット州グラストンベリ)

【参照動画】祝祭ヘルテン <http://www.youtube.com/user/ErikoKawanishi?blend=23&ob=5&fp/u/22/kmHrJNVZBM>



二〇一〇年旧暦元旦のハリド

暗闇でブラックライトを当てた夜光龍



龍に出会う街・香港

辻本 香子 総合研究大学院大学博士後期課程

新しい年を祝う願

香港の一月一日は、大晦日のカウントダウンと打ち上げ花火ではじまる。中華人民共和国の一部となつて一二年半が経つが、植民地時代の名残で、西暦の新年も西洋式に祝うのである。しかし、やはり旧暦の正月のほうが大きな行事であり、香港の人びとが「新年」というとき、それは旧正月をさす。この時期に中国語圏や、そして世界のチャイナタウンを訪れると、派手な色の獅子が行き交い、光る目玉をもつ龍が、珠を追いかけて舞うさまを見ることができるといえる。

これはまともな龍獅芸として語られることが多いのだが、ここではおもに龍舞をとりあげる。

芸能からスポーツへ

龍舞はもともと、龍の胴体を色とりどりの布で飾ったり火を灯したりしたものを大人数で支え、太鼓のリードのもとに金属製楽器の音を伴って練り歩くもので、地域の伝統芸能として受け継がれてきた。中国の南部を起源とする南方龍舞は大型、北方龍舞は小型の龍を用いるのが特徴で、それぞれ南北の戯劇で用いられる楽器を使う。しかし二〇世紀後半、シンガポールやマレーシアの華人たちが、北方龍舞を現代的なスポーツとして洗練させたところ、それが世界各地に広まり、舞い手九名と龍珠を担当する一名という規格に沿った龍舞が多く見られるようになってきた。列を作って練り歩くだけでなく、走り、跳び、舞い手の身体を組体操のように使うことで、龍は生き生きとした動きをみせる。龍に蛍光塗料を塗り、人が黒い服を着てブラックライトを照射し、龍と珠だけを暗闇に浮かびあがらせる「夜光龍」というスタイルも定着した。こうなると地域で継承される芸能という枠組みは外れ、演じられる場も体育館や運動場へと広がる。フィギュアスケートや体操のような得点制の審査基準が設けられ、各地で競技会が開催されている。さらに太鼓・シンバル・銅鑼という伝統的な組み合わせのほかいろいろな楽器が投入され、衣装や装飾にはLEDが使われるなど、華やかさも増している。

日常のなかで遭遇する

しかし香港では、こうした祝祭日や競技会に限らず、ショッピングモールや会議場、レストランなどで龍が舞う姿に遭遇することがある。個人が開催する誕生会や食事のイベント、開店祝いといった機会に太鼓とシンバル、銅鑼の音が響くと、人びとは競って携帯電話で龍の写真を撮る。日々の都市生活のなかで、ふいに龍舞に出会うことができる環境が成立しているのである。狭い面積に七〇〇万人の人びとが暮らす大都市・香港は、芸能の枠すらも超えつつある龍にとって、あらたな棲み家なのかもしれない。



民博 東アジア展示場 中国地域の文化コーナー
に展示されているミャオ族の竜船頭 H0101736

龍女のため息

君島 久子 民博名誉教授

民博に潜む龍

民博には龍がいる。美しいうろこのある頸がのび、立派な角に輝く大きな眼。彼の故郷は中国、貴州省の清水江。ミャオ族の最大の祭「龍舟節」で、白い波しぶきをあげながらたくましく闘った龍なのである。独特の長い丸木船に三十数人が乗り、立って漕ぐ。むかしは全員しゅろの蓑と笠をつけたと聞き、銀色にうねり輝く巨龍のうろこを想像した。龍舟競争がはじまる瞬間、彼らは龍になり神になるという。娘たちの民族衣装にも龍が刺繍され、髪飾りにも白銀の龍たちが揺れている。

水の底の桃源郷

この清水江を下ると沅江に入り、やがて洞庭湖に入る。この広大な湖は季節ごとに水位が上下する。それにはこんないい伝えがある。

ある漁夫があらしの洞庭湖で乙女（龍女）を助ける。彼女はお札に龍宮に招くため「分水珠」をわたす。彼が約束どおり分水珠をもって湖辺に立つと湖水がわかれて一條の道が続き龍宮があらわれる。龍女と結婚し竜宮城での楽しい日々を過ごすうち、ふと母親を思い出し帰郷を決める。龍女は宝の宝箱を渡し「決して開けるな、会いたいときはわたしの名を呼べばよい」と念をおす。

帰郷してみると村の様子は変わり、見知らぬ人ばかり。龍宮の一日は人間界の一〇年にあたっていたのだ。漁夫は驚き龍女に尋ねようと宝箱のふたを開けると、

なかから白い煙が立ち上り白髪の翁となつて死んだ。が、死後も目を閉じることなく洞庭湖をずっと見つめ続けている。すると突然湖の水が満ちてきた。これは龍女がほつため息をついたからだ。湖の満ち干は龍女のため息だと伝えている。

この話は沖繩の「遺老説伝」やわが『万葉集』の浦島説話に通じている。もともと「龍宮」なる表現は『日本書紀』『風土記』『万葉集』などの類話には無く、室町時代の『御伽草子』に至って初めてあらわれる。中国の場合も水神龍神の館はすでに紀元前四世紀ごろの『楚辭』に「魚鱗の屋根に龍の堂、紫貝の門に朱の宮居」とあり、晋の『搜神記』等にも水神の邸で娘を妻にする話はあるが「龍宮」なる語は唐代以降である。『梁四公記』に「震沢の洞庭山の西南に深さ百尺余りの洞穴があり、五十里余り進むと龍宮がある」等。

龍宮からもち帰るのは

面白いことに現在の民間伝承では浦島のように破滅する話の他に龍宮からもち帰った呪宝により、むしろ現世で豊かになる話がある。たとえば洱海のペー族では、龍宮に三日間招かれた男が帰郷すると三年も経っている。もらつてきた宝の瓢箪のおかげで豊かになる。兄弟夫婦が瓢箪をもち去り、宝船を要求したために船が沈み、瓢箪は龍宮に帰ってしまう。蒙古族では、魚（龍女）を逃がしてやった漁夫が、龍宮へ招かれて、犬をもらう。帰郷すると長い年月が経っており、母はとうに亡くなっている。犬が皮を脱ぐと龍女があらわれて妻になる。支配者が妻を奪うため難題を出すのが龍宮の手柄の力で打ち負かす。

ともあれ今は民博の龍も無聊をかこっている。しかし『説文』によれば龍は「鱗虫の長」であり、「春分にして天に昇り、秋分にして湖に潜み、変幻自在」の霊力をそなえている。民博に潜む龍の躍動のときを期待しよう。

弥生時代にきた龍

金関 恕 大阪府立弥生文化博物館館長

龍をしめした土器に出会う

土器に描かれた不思議な動物の絵を初めて見たのは四〇年ばかり前のことだった。和泉の池上曾根遺跡で弥生時代の井戸から掘り出された壺の肩を飾る図形（下図右）である。見て龍だと直感した。記憶は定かでないが、S字状にうねる胴や開いた口などから漢の鏡にあらわされた龍形との似通いを思い浮かべ、井戸と水から龍を連想したのだろう。同様の図柄のある壺は河内の船橋遺跡でも採集されていた。これらの土器の年代は二世紀初ごろである。

弥生土器に鹿、鳥、家、舟、魚、人などの姿かたちを線刻した例は少なくない。画材はすべて弥生人の身のまわりのものである。しかしそれも一世紀の初葉ごろまで、以後は記号的な図形に変わってしまう。一方、龍の絵と見られるものは一世紀後半ごろに登場し始め、古墳時代の始まりとともに姿を消す。最初の発見から今までの四〇年のあいだに、龍をあらわした弥生土器の出土数は増え、記号化したものを併せると、七八遺跡で一五〇点を超える。

水を支配する蛇

龍の姿を初めて見た倭人は、前二世紀後半に北部九州にあったいくつかの小王国の王たちだったと思われる。王たちは、朝鮮半島に設けられた楽浪郡を通じて漢に朝貢し、鏡などを手に入れていた。鏡の文様には四神のひとつとして龍の図像が鑄だされたものがある。佐賀県唐津の桜馬場遺跡出土甕棺の副葬の鏡はそのひとつに数えられる。とはいえ、土器絵画の画き手が鏡の龍文様を直接見たとは思われない。あるいは四神の思想を理解していたということもないであろう。むしろ、水や降雨を支配する中国の龍信仰が伝えられ、流布するようになったと考えられる。弥生土器の画き手は口頭で受けた説明をもとに龍を絵にあらわした。

おそらくその説明で強調されたのは「体は蛇で足があり大きな眼と角とたてがみをもつ」という程度の情報だった。ところによつては牙も表現されている。本場の中国でも龍の元の姿は蛇であり、湿地に生息する蛇には水を支配する力があると信じられていた。最古の龍の姿を伝えるのは河南省西水坡遺跡の例である。一体の遺骨の両側に貝殻を並べて龍と虎が巧みにあらわされている。六〇〇年前の仰韶期のものである。しかし殷周以降の水を支配する龍信仰に繋がるかどうかわからない。

謎多き幻獣

殷の祭祀用の青銅器の中心に大きくあらわされているのは饕餮とよばれる恐ろしい正面向きの顔である。ただし、この呼び名は後世のもので、殷のむかしにどうよばれていたかわからない。著名な考古学者であった林巳奈夫さんは、これを殷人の崇める上帝の表現だと考えた。青銅器にはこの饕餮の脇、あるいは目立たない位置に、小さくあらわされた獣の像が布置されている。虎、鼈や龍などの獣像や怪獣像には対応する甲骨文字もあり、あるものは、殷帝国の周辺の民族の標識ではないかと考えられている。わたしは、雨を支配する雨師を呼ぶ巫のトームが蛇であり、雨乞い祭りに巫が、手足はそのままだに蛇を装って儀礼を主導したのが龍の原形ではないかと空想している。



大阪府池上曾根遺跡出土弥生後期の壺の腹部に表現された龍の記号。弥生の龍は短期間で元の姿を失い、記号化していく（大阪府立弥生文化博物館所蔵）

大阪府池上曾根遺跡の井戸から出土した弥生後期の土器と線刻された龍の絵。龍の尾の右にあらわされているのは稲妻かという推測もある。中国の龍にはない鱗（ひれ）をもっている（大阪府立弥生文化博物館所蔵）

歌舞伎十八番『鳴神』と竜神

古井戸 秀夫 東京大学教授



初代市川團十郎の鳴神上人(『元禄歌舞伎傑作集』上巻『源平雷伝記』より)

竜を封じ込めた男
鳴神上人は、竜を封じ込めた男であった。
原拠となったのは、インド神話の一角仙人である。
名前の由来は、出生譚にあった。一角仙人の父は美しい天女を見て欲情し、精液を水のなかに落とし、一滴の水が飲んだら、その水を飲んだ雌鹿の腹から生まれた子であった。額から一本の角が生えていたので、一角仙人とよばれることになったという。
一角仙人は、竜を封じ込めた男でもあった。『今昔物語集』(巻五の四)には、諸々の竜王を捕えて水瓶に封じ込めたところ。原因は、雨に濡れた苔の道で滑り転んだことになった。そのことに腹を立てて、雨を降らした竜王を封じ込めたのである。
芸能にあらわされた雷神
「一角仙人」という能には、この作品にだけ使用する特殊面がある。「怪士」系の痩せ衰えた男の額から角が生えている能面である。一角仙人は、旋陀夫人という美女に誘惑されて神通力を失い、封じ込めた竜神に逃げられてしまう。竜神の頭には、竜のオブジェが載せ

られている。「竜戴」とよばれる被り物である。竜神の役を子方が勤めるときは素面だが、大人の役者のときには「黒髭」という能面を掛ける。竜の強さを表現した能面である。
歌舞伎では、主人公の名を鳴神とした。古い台本では、「雷」と書いて「なるかみ」と読ませている。雷神を表象したものであった。誘惑する美女の名は、雲の絶間姫であった。鳴神上人の二人の弟子は、白雲・黒雲という。雲と雲のあいだから、雷神を落とす意味が込められていた。そこには、女の白いふくら腰を見て空のうえから落ちたという、糸の仙人のイメージが重ね合わされていたのである。騙されたことを知った鳴神上人は、生きながら雷神に変身する。清楚な白の縷子の衣裳は、観客の目に見える前で真っ赤な火炎と稲妻の模様になった。衣裳のこの仕掛けを「ぶつ返り」とよんでいる。美しく撫でつけられた黒髪は、怒りのあまりに逆立って大きくなった。「百日の秘栗」という名の髪である。髪には、「ピッチュウ」という黒く大きな採み上げもつく。顔には紅で隈取をとり、鳴神上人は雷神へと変身するのである。

超越的思想の誕生

龍はさまざまな現実の生き物を融合して創造した架空の生き物である。これにたいし蛇は現実存在する爬虫類である。蛇を崇拝する人びとと、龍を崇拝する人びとの思想には、大きな相違がある。

龍が誕生したということは、人類が現実世界に存在する生き物を崇拝していた時代から、あらたに架空の融合動物を崇拝する時代を創造したことを意味する。わたし(拙著『龍の文明史』八坂書房 二〇〇六年)は、それを超越的思想の誕生とみなした。

龍の信仰が確立するまで

では龍はいつ、どこで、誕生したのであろうか。龍の原型となる融合動物が誕生したのは八〇〇〇年前である。場所は中国東部の内モンゴルから遼寧省にかけてである。

内モンゴル自治区 小山遺跡から出土した八〇〇〇年前の土器には、鹿・猪・鳥それに魚が融合した動物が描かれている。現在では見渡す限りの草原が広がる内モンゴルの平原にも、八〇〇〇年前には森が存在した。その森に生息する鹿や猪、林床を流れる川に生息する魚、そして大空を舞うワシなどを融合した架空の動物を、中国東部に住んでいたモンゴロイドが最初に創造した。

それから一〇〇〇年たった七〇〇〇年前の遼寧省 査海遺跡からは、長さ一九・二メートル、幅



龍の姿は宋代に確立



龍は皇帝のシンボルになった

龍と気候変動

安田 喜憲 国際日本文化研究センター教授

約三メートルの石組みの龍が発見された。足元には雲とみなされる石組みもある空を飛ぶ龍である。そして頭を南にして正確に南北の中軸線に配置されている。

さらにこの査海遺跡からは、三〇〇点以上の縄文時代の円筒式土器とよく似た土器が発見された。その七〇〇年前の土器片のなかに、紅色をつけた龍がいた。龍の尻尾とどろろを巻いた頭の一部は紅色だった。『山海経』には、「崑崙山の神樹に生息する龍は紅色をしている」と書いている。龍はもともと紅色をしていたのではないか。

それから一〇〇〇年たった六〇〇〇年前の紅山文化の遼寧省牛河梁遺跡からは、玉で作った龍が発見された。さらに河南省西水坡遺跡からは、貝で作られた龍が出土している。それは誰が見ても龍だとわかる。六〇〇〇年前には龍の信仰が確立していた。

自然現象とともに飛翔する

では龍はどのようにして誕生したのか。龍が誕生しその信仰が確立した八〇〇〇年前から六〇〇〇年前は、地球の気候が温暖化する時代だった。地球温暖化の時代には、災害が多発する。大雨や干ばつさらには強風が吹く。内モンゴルの大地では竜巻も多発したのであろう。こうした自然現象に直面して、人びとは天空を飛翔する龍を発想したのではあるまいか。



「梅棹アーカイブズ」の活用に向けて

ほった
堀田 あゆみ

総合研究大学院大学博士後期課程

民博の初代館長梅棹忠夫がのこしたフィールド・ノート、スケッチ、写真などの資料は「梅棹アーカイブズ」とよばれている。2011年度よりこの膨大な資料の整理とデジタル化、登録作業がはじまった。本共同研究では、梅棹アーカイブズのうちのモンゴル関係の資料を整備しつつ実際の活用を考える。

モンゴル研究資料

梅棹アーカイブズのなかのモンゴル関係資料というのは、一九四四年から一九四六年にかけて中国内蒙古自治区などでおこなわれた調査研究の資料である。フィールド・ノートが約五〇冊（今西錦司らのものもふくむ）、スケッチ約二〇〇点、写真一〇〇点（和崎洋一コレクション）、ローマ字カード約二〇〇〇点、地図三点、原稿約一〇〇〇枚などがふくまれている。これらの資料の一部は、著作集第二巻『モンゴル研究』の編集の際に一度整理されたものの、ほとんどの資料は未整理のまま保管されてきた。これらすべての資料を解説し、分析することによって、当該地域の当時の自然環境や生活様式、社会関係や物質文化などをつまびらかにすることが可能になる。本共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」は、今後のアーカイブズ資料の整備・活用に向けた実証的研究のパイロット的な事例として位置づけることもできる。

共同研究メンバー

モンゴル研究資料の解説をすすめるにあたり、学際的に研究者が集まった。歴史学および民族学の視点から分析を担当するのが静岡大学の楊海英教授、言語学からは富山大学の呉人恵教授、牧畜論の分析に

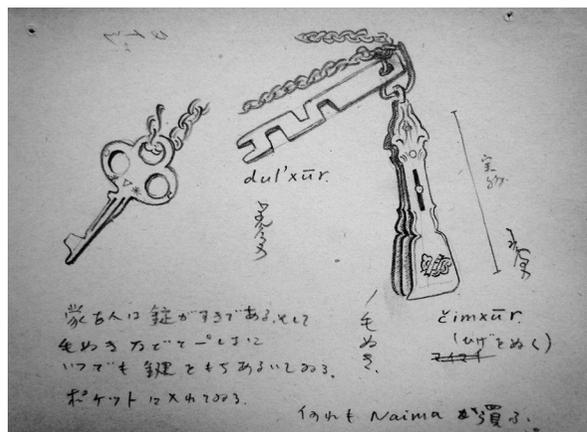


和崎コレクションの写真はデジタル化することによって分析が容易になった。写っているのは、モンゴル牧畜民の一家

からそれぞれ言語学、民族学、歴史学の専門家を集めた研究チームが編成されつつある、という。二〇一三年二月には日本で国際共同研究会をひらく計画があり、その成果は日本語ならびにモンゴル語で出版される予定である。国際共同研究をとおしてえられた成果が、調査後七〇年を経て現地に還元されることになる。

書き込みのスケッチ

二〇一一年一〇月一〇日、民博の梅棹資料室に日本の共同研究メンバーが集まりアーカイブズ資料と対峙した。資料の量もさることながら、精緻なスケッチ、フィー



スケッチには、観察・聞きとり内容が書きこまれている

ルド・ノートに書きつけられた多岐にわたる詳細な事象、それと同時に将来の研究の枠組みを構想する大局的見地が併存していることに圧倒された。梅棹忠夫の知的遺産を正確に読みとるにはどうすればいいだろうか。長期的な取りくみが必要であることを確認すると同時に、一年半というかぎられたプロジェクト期間のなかで最大限の成果をうむ方法について議論した結果、特にスケッチと写真に焦点を絞ることが決まった。

二〇〇点におよぶスケッチには、さまざまな書き込みがされている。えがかれた対象物の収集地や寸法、素材、部位ごとの名称、用途、用法、特徴、製作者などの情報が、モンゴル文字と発音記号およびカタカナで表記され、日本語の説明が付記されている。一九四〇年代の当該地域の物質文化を知る手がかりとなる非常に貴重な資料である。他の資料に付属するスケッチも入れると三〇〇点ぐらいに増えそうだ。また、和崎コレクションである一〇〇枚の写真には、家畜の搾乳や移動といった草原のくらし、寺院や市街のさまなどが映しだされており、民族誌のおよび歴史的資料としての価値があると判断された。

これらの資料をカタログ化するとともに、各研究者の専門的な視点から多角的な内容分析をくわえることにより、当該地域の

研究にとどまらず牧畜研究や遊牧研究といったさまざまな研究分野への展開が期待される。

梅棹忠夫のみたモンゴル

現代のモンゴル遊牧民のモノをめぐる文化について研究している筆者にとつて、梅棹アーカイブズのモンゴル研究資料は、七〇年前の遊牧民の生活世界がぎっしり詰まった玉手箱である。現代の物質文化との比較や、当時の人びとのモノとの関係性を探ることも可能であろう。偉大な先達の手で記録された貴重なスケッチや書き込みを一言一句もろさぬよう、気合を入れて分析作業にのぞみたい。

共同研究

「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」
2011年10月～2014年4月
代表者：小長谷有紀（民博・民族社会研究部教授）

「研究関連情報」

■「フメサオタタ才展―未来を探検する知の道具―」開催中。

開催期間：2011年12月21日（水）～2012年2月20日（月）

場所：日本科学未来館
〒135-0064 東京都江東区青海2-13-16

■国際学術交流協定に基づいた中国内蒙古大学との国際共同研究会。

2013年2月（予定） 大阪

時間 10時30分～16時30分(受付10時より開始)
集合場所 ナビひろば
※参加無料、当日受付(先着20名)

「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」
雪と氷の地、乾燥した砂漠や草原、熱帯雨林などの多様な自然。古代文明の興亡、ヨーロッパによる植民地化、アフリカやアジアからの移民などの重層的な歴史。そして、さまざまな人間と文化の出会いと交わり。アメリカの多様性と興行を味わっていただくため、イベントをたつぷり用意しました。

会期 1月7日(土)～3月25日(日)

■関連イベント
◆みんぱく映画会/みんぱくワールドシネマ「今夜列車は走る」
日時 1月14日(土) 13時30分～16時30分(開場13時)
場所 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆研究公演
「アンデスの詩(うた)」
南米アンデス地域の民俗音楽folkloreを、日本の第一人者である瀬木貴将さんが演奏します。アメリカ大陸で誕生したボサノバやジャズとの組み合わせもお楽しみください。
日時 2月11日(土・祝) 14時～16時
場所 講堂(先着450名) ※参加無料、要申込
申込締切 1月26日(木) 必着
申込方法
往復はがきに住所・氏名(返信用おまてにも)・年齢(任意)・電話番号・参加希望人数(本人を含めて4名まで)と研究公演タイトル・実施日を書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。

◆「たつ」を探して大きなパズルをどうする」
展示場にあるたつをカメラ付き携帯や、デジタルカメラで写して見て来てください。参加者はそれをヒントに大きなジグソーパズルをとしていきます。カメラをお持ちでない方も参加可能です。

◆研究者によるキャリアトーク
解説 岩谷洋史(国立民族学博物館機関研究員)
時間 ①11時～11時30分
②14時～14時30分
場所 企画展示場B

◆ワークショップ
「たつ」を探して大きなパズルをどうする」
展示場にあるたつをカメラ付き携帯や、デジタルカメラで写して見て来てください。参加者はそれをヒントに大きなジグソーパズルをとしていきます。カメラをお持ちでない方も参加可能です。

お問い合わせ先
広報企画室 企画連携係
電話 06・6878・8210

◆みんぱくセミナー
左のページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン
フォーラムの期間中は、特別シリーズとしてアメリカにまつわるお話をお届けします。詳細は本誌24ページをご覧ください。
※この他にもイベントを予定しています。お楽しみに！

「ウメサオタオ展——未来を探検するの道具——」
みんぱくで開催された特別展「ウメサオタオ展——知的先覚者の軌跡」をバージョンアップしたもので、とくに「情報産業論」に関する展示が増えます。
会期 2月20日(月)まで
会場 日本科学未来館
東京都江東区青海2-3-6
電話 03・3570・9151(代表)
http://www.niraikan.jst.go.jp/sp/umesaotadao/

◆「子どもに語るアラビアンナイト」
こぐま社 定価：1,680円

ベルシアのお妃シェヘラザードが、王さまに命をかけて語った千と一夜の物語、アラビアンナイト。今回、研究者とベテランの語り手により、子どもが耳で聞いて楽しめるアラビアンナイトが実現しました。



◆「民博通信」2011 No.134(12月発行)
評論・展望
フォーラム化する文化人類学
——大学共同利用機関としての
国立民族学博物館が果たすべき役割を考える
佐々木史郎

◆土方久功 著 須藤健一・清水久夫 編
『土方久功日記Ⅲ』
国立民族学博物館調査報告 No.100

みんぱく出版物入手方法については広報係にお問い合わせください。 電話 06・6878・8560

●展示場構築のお知らせ
ヨーロッパ展示とヒメオタク、学習コーナー、本館展示場出入口付近が3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、その一部が工事のため閉鎖されます。
閉鎖期間 1月上旬～3月14日(水)

●休館日・無料観覧日のお知らせ
年始は1月4日(水)まで休館します。
1月9日(月・祝) 成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。

●東日本震災被災地に対する本館の取り組みについてはホームページをご覧ください。
毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろな地球人」みんぱくの研究者のエッセイが毎週木曜日に掲載されています。

*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

みんぱくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第404回 1月21日(土)
「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」関連
アメリカ南西部先住民の宝飾品
講師 伊藤敦規(国立民族学博物館助教)



きらめく銀、空色のトルコ石、太陽の赤のサンゴ。アメリカ南西部の先住民の宝飾品は広く世界に知られています。この地域の民族集団に特徴的な宝飾品の様式をご紹介します。とともに、民族集団ブランドとして創出したホビ族の宝飾品産業の歴史と現状を詳しく解説します。

第405回 2月18日(土)
「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」関連
カレンダーから現代宗教を見る
講師 中牧弘允(国立民族学博物館教授)



みんぱくには1000点をこす世界各地のカレンダーが収集されています。そのなかからとくに現代宗教にかかわるものを取り出し、その意味を文化的・文明的に理解し、世界の動きのなかでどのような役割をはたしているかをかんがえます。カレンダーは身近なアイテムですが、奥は意外に深いのです。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)
第404回 2月4日(土) 14時～15時
「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」関連
「フィードバックの醍醐味を語る」
マヤから世界へ
私のフィードバック体験
講師 鈴木紀(国立民族学博物館准教授)

第405回 3月3日(土) 14時～15時
「世界のパスポート」世界
講師 陳天聖(国立民族学博物館准教授)
パスポートはなぜ必要なのでしょう?世界各地のさまざまな種類のパスポートの事例をとおして、それぞれの保証内容や発行機関について、また、発行する側と所持し、使用する側の意識のずれなど、人びとの帰属意識をめぐる思いについても考えてみます。

「たつぷりアメリカ——春のみんぱくフォーラム2012」関連
親子ワークショップ
1. アルゼンチンのカーニバルの仮面をつくらう
2月12日(日) 14時～15時
世界遺産ウマワカ渓谷のカーニバルについてのお話を聞いて、仮面をつくらう。
2. ひまわりの楽器をつくらう——ホビのくらしとお天気
3月10日(土) 13時30分～15時30分
ホビの人たちのくらしやお祭りのお話を聞いて、ひまわりの楽器をつくらう。展示場も見学します。

※要申込。仮面、楽器づくりには材料費が必要です。内容や詳細は上記友の会までお尋ねください。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
[World Wide Bazaar]
http://www.senri-f.or.jp/shop/

今年の干支(龍)で福をよびよせて

ミュージアムショップでは龍にちなんだ商品をそろえています。
呉須で龍が描かれた香炉は、スティック型、コーン型、渦巻型のお香をご利用いただけます。
龍の匂ひ袋は衣服に香りをうつしたり、鞆にしのはせたり、床飾りや玄関飾りなどで、さりげない香りの演出をお楽しみいただけます。
干支ストラップには、めでたい前兆をもたらす幸運をよぶと云われる「雨龍」がデザインされています。



香炉 2,940円(税込)
匂ひ袋 1,365円(税込)
干支ストラップ 1,300円(税込)

グアテマラ——虐殺の記憶とコミュニティ再生の拠点 ラビナル・アチ・コミュニティ・ミュージアム

せき ゆうじ
関雄二 民博 研究戦略センター

ラビナル・アチ・コミュニティ・ミュージアムの入り口



歴史展示室入り口

グアテマラ初の コミュニティ・ミュージアム

中米グアテマラの首都より車で四時間ほど北上すると、バハ・ペラパス州のラビナル市に着く。ミュージアムは町外れにあり、スペイン語とアチ語で記された小さな看板は、うっかりすると見過ごしてしまう。二〇〇一年、グアテマラ最初のコミュニティ・ミュージアムとして開館し、その名のとおり、ラビナル・アチというマヤ系先住民が自主的に運営する。設立趣旨には民族の歴史をとどめ、豊かな文化を伝承・発展させることが謳われている。

内戦下の虐殺の記憶

中庭を囲む展示室には、民族の起源を示す考古学遺物こそ飾られているが、展示の中心は、ラビナル・アチ集団の二〇パーセントにおよぶ四四一一名が虐殺された歴史にある。犠牲者の遺影と、虐殺状況を克明に記したテキストで溢れる部屋は静寂さに包まれ、重い空気が漂う。

グアテマラでは一九六〇年に内戦が始まり、一九九六年にゲリラ側と政府とが和平協定を締結するまで二〇万人もの国民が共産主義撲滅のスローガンの下で虐殺された。その多くは先住民であった。国軍が虐殺に手を下す場合もあれば、先住民に自警団を組織させ、同胞に銃口を向けさせた例もあった。つまり被害者と加害者が集落内で同居する状況さえ存在する。

そのため、復興には当事者間の和解が必要であり、虐殺を記憶にとどめ、暴力の連鎖を断ち切り、被害者の尊厳を讃える追悼施設が求められ、実際に各地で追悼施設が建てられた。しかし、追悼だけでは必ずしも和解にはつながらない。



虐殺犠牲者の遺影のあいだに内戦当時の大統領の帽子が展示されている。これは和平協定締結後、大統領来訪時に犠牲者の遺族が振り落としたものだ

共生空間の創造へ

暗く重い展示空間を一步出ると、向かいの展示棟には、現在そして未来に向けたメッセージを伝える別の部屋が控える。そこには子ども、特に少女たちが自ら撮影したマヤ系民族の日常生活の写真が飾られ、内戦で失われた民族の伝統再生を次世代に託す実践が試みられている。子どもたちが、情報端末に触れながらマヤ系言語を学ぶコーナーもある。このミュージアムは、民族の存在を否定された人びとが、過去を記憶しつつもあらたな共生空間を創造するという難題に自ら取り組む空間なのである。

みんぱく 私の逸品 竜骨車

標本番号 H00000394、H00000308
地域 タイ王国
受入年度 1974年

民博文化資源研究センター
久保正敏

干支えとに合わせて、みんぱくの標本資料を竜、龍やタツで検索してみると、水に関係する資料がいろいろ見つかり、タツが水と縁の深いことが知れる。

そのなかから、揚水器のひとつ竜骨車りゅうこつぐるまをとり上げよう。以前の東南アジア展示場には、水を汲み上げる様子が電動模型で示されていたが、一九九六年のリニューアル時に電動模型は引退、現在展示されているのはタイの実物た二点。竜骨車については既に、本誌一九八五年六月号で田邊繁治たなべしげはる氏がタイのものを、二〇〇四年一〇月号で近藤雅樹ちんどうみやき氏が日本のものをスクリーンポンプである竜尾車と対比させて紹介している。

竜骨車は後漢のころの中国洛陽が発祥の地、その後東南アジア各地の水田稲作地帯に広まっていた。英語で square-pallet chain pump とよばれるように、木製チェーンで、輪状につながれた四角い竜骨板りゅうこつばん（パレット）が人力や畜力で回転し、輪の下側部分が木製の樋ひのなかを上昇して水を汲み上げ、輪の頂点まで運ぶ。宋代以降、中国江南地方の農民が、チェーンにパレットが並ぶ様子を竜の背骨に見立てて命名したとの説が有力だ。

タイでは一九七〇年代まで使われており、みんぱく所蔵の「稲作民族文化総合調査団 第一次調査団（一九五七―五八年）撮影写真」のなかにも、使用中の様子を写したものがあつた。日本では、八一九年に朝廷が普及を図ったものの、水田が未だ少なく、すぐには広まらなかったが、江戸時代には農業技術力の高い畿内を中心に普及していた様子は、多くの絵図などからうかがえる。

パレットと樋のあいだに隙間があれば水が漏れるし、チェー

ンも精度が悪ければ力がうまく伝わらないし、摩擦する。木製だが精密器械であるゆえか、一八七七年に開かれた第一回内国勸業博覧会に、滋賀県の川村平兵衛かわむらへいべが竜骨車を出品した。もともと、精密であるだけに保守が大変で、江戸中期にチェーンをなくし、樋を四分の一の円筒に置き換えた「踏車」が考案されてから急速にすたれたが、畿内では戦後、動力揚水機が導入されるまで使われ続けた。滋賀県や愛知県を中心にいくつかの博物館に残る数少ない実物資料から、稲作にかける日本人の思いを確認できる。



蠟人形は答ええず

ハリウッドで、マダム・タッソー蠟人形館を訪ねた。

親でできたハリウッドスターたちと記念写真を撮りながら、ついつい「彼ら」とよんでしまうほど

本物そっくりな人形をめぐって、どういう権利が発生するのだろうか、ふと疑問に思った。

肖像権は？ 著作権は？ そこから、博物館の展示品の真正性、作品制作の今後へと思索は進む。

マダム・タッソー蠟人形館

昨年の夏に家族旅行でロスアンゼルスに赴いた。

親としては子どもたちにも全米日系人博物館で学び、ブランドキャニオンに感動してもらいたいが、子どもたちのお目当てはやはり本場のデイズニールランド。親と子がそれぞれの思惑をもちながらあちこち訪れたなかで、双方ともに楽しめたのがハリウッドにある蠟人形館だった。

マダム・タッソーというおばあちゃんが作り始めたという有名な蠟人形を展示しているこの施設、最初ロンドンに作られ、後に分館が世界各地に作られた。ハリウッドにある分館での楽しみは、なんとと言ってもハリウッドスターをはじめとする有名人(の蠟人形)と一緒に写真に写ることである。筆者もむかしから大好きだった『明日に向かって撃て』のブッチ(ポール・ニューマン)とサンダンス・キッド(ロバート・レッドフォード)とともに記念写真におさまった。

蠟人形は、著作物？ コピー？

ここでふと考えた。一緒に写真に写っているのは蠟人形である。ということは、わたしが、彼ら(もしくはそれら)と一緒に撮った写真には、二人の肖像権は発生しないと考えてよいのだろうか。また、蠟人形はマダム・タッソーとその後継者が制作したものである。ではそれらの人形に著作権が発生するのだろうか。著作物とはオリジナルなものでなければいけない。でも、蠟人形とは実在する人間にそっくりなものにすぎない。あらたなアイデアが形になったものではない。この蠟人形とは一体、何者、いや何物なのだろう。著作物なのか、それともコピーなのか。これは博物館や美術館に展示している複製品に、どのような権利が発生するかという問題とも少なからず関係している。複製品には基本的に著作権は生じない。複製品の制作者はオリジ

ナルの著作者ではないので、著作権を主張できない。

見る者にとって展示されているものが複製品であるかどうかを知っておくことは案外重要である。あたりまえのことであるが、蠟人形は複製品であるということがちゃんとわかっているからこそ、お客さんが「気味が悪いほど本物に似すぎている」と声を上げたりして楽しめる。だが、一般的には博物館や美術館で、複製品やそれに類似するものをそれと表示せずに展示した場合には、来館者はおそらくそれらがオリジナルであると誤解するだろう。これは、来館者に対する最大の不義理だと筆者は考えている。

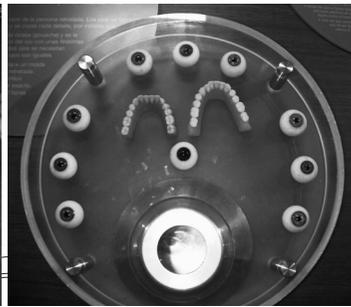
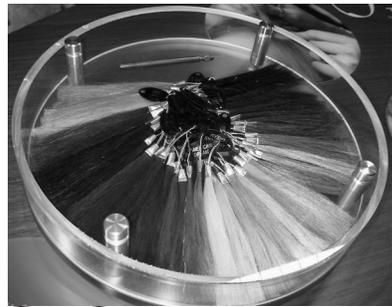
コピーが無限に作られるデジタル時代

筆者はそもそも現在の知的財産権のありかたに懐疑的なところがある。数年前に民博でおこなった研究会でこんな提案をした。「各博物館がウェブページで収蔵品や展示品を積極的に公開する。そして、来館者が自らの博物館、美術館観覧の履歴を公開できるようなマイページのしかけをインターネット上に作る。それを使って自分と他人の観覧履歴を相互閲覧しながら、どんな博物館や美術館に行つて、どんな展示物を観覧して感動したかという情報を交換すれば、博物館や美術館のユーザーの世界が広がるのではないか」というものだった。すると、ある美術館関係者から「民博ともある博物館が、著作権をまったく理解していないこんなプレゼンをするなんて信じられない。我々がどれだけ作品の管理団体を相手に大変な交渉をしているかわかっていない」と厳しい指摘を受けることになった。さらに「サムネイル程度なら許されるでしょう。コピーしても売り物にならない程度の解像度になっていけばよいのでは」という発言も飛び出した。筆者にしてみれば、ウェブページに掲載されるのが、サムネイルであろうと詳細画像であろうと、著作者が気分を害すれば、その権利は侵害されたことになるように思えてならない。サムネイルならよいというのは、作品とは経済的に利用すべき財であるという発想を前提にしているのではなからうか。「お金」になる作品を多く抱えている博物館や美術館と諸民族の日常生活品を中心に展示している民博との立ち位置の違いもあると思うのだが。

作品そのものに対価を払うという時代はいつまで続くのだろう。YouTube に代表される無料動画投稿サイトなどで、作品やそのイメージのコピーが無限に作られる現代、この方式では人びとの制作意欲は干上がってしまうかもしれない。だとすれば、作品が生み出されていくその過程にお金がつぎ込まれるようにすれば、作り手も尊重されるのではなからうか。こんなことを、スピルバーグ監督にたずねてみたら何と答えてくれるのだろうか。もつとも

蠟人形に話しかけたところで何も答えてはくれないのだが。

(注) 肖像権にはプライバシーを保護する権利と、ある人が写真等を勝手に使用されない権利とがある



毛髪や眼、歯列は個人の身体的特徴を示す重要な部分。かつて自然人類学の教育において、人種の講義などに同様なものが教材に使用されていた



マダム・タッソーの蠟人形



スピルバーグ監督の蠟人形。何か言いたげだと思ふのは、見る側の気持ちを反映するの



民博の展示場にもいくつか複製品が展示されている



あこがれの映画スターと写真におさまる筆者。当たり前のことだが「彼ら」は年をとらない。撮影は筆者家族

<p16-17掲載の蠟人形について> 制作・所蔵 マダム・タッソー蠟人形館。同館はアトラクションの作品を撤去、または変更する権利を有する

商いが文化を育てる

鈴木紀

民博 先端人類学研究所

「文化」と「商い」。

このふたつのごとくはの組み合わせに、違和感をおぼえる方も少なくないだろう。

「商い」には「取引」や「金」など、営利重視の印象がつきまとうのかもしれない。しかし、「商い」には、それにとまらぬもうひとつの姿がある。

ここでは、アメリカ中西部の二軒の雑貨店とフェアトレード・チョコレートの事例を紹介する。そこから見える営利にとまらぬ「あきない」の姿とは。

街の民族学博物館

多文化を育てる商いとは、どのようなものだろうか。アメリカやヨーロッパの街を歩くと、開発途上国の手工芸品を扱う店をよく見かける。二〇一一年五月、わたしはカリブ海での調査の帰路、アメリカ中西部のシカゴに立ち寄り、郊外のオークパーク地区にある一軒の店に入った。そこはテン・サウザンド・ビレッジという、アメリカとカナダに多数の店舗を展開する企業の店だった。ゆったりとした店内には、「一万の村」という店名通り、世界各地で作られたさまざまな物が売られていた。どの商品にも小さな正札が付いていて、値段とともに生産地が書かれている。商品はジャンル別に置かれており、例えばインテリア雑貨のコーナーでは、コンゴの仮面とベルーの織物、バングラデシュのランプが並んでいた。アクセサリーのコーナーでは、フィリピンのガラスのイヤリングとメキシコの貝のネックレス

フェアトレードの効果

それではフェアトレードほどの程度効果があるのか。わたしはフェアトレード・チョコレートに着目し、チョコレートの原料であるカカオの生産者の暮らしについて調べている。日本で売られているフェアトレード・チョコレートの多くは、南米ボリビアにあるカカオの生産者団体エル・セイボの豆を原料としている。エル・セイボは、アンデス高地からアマゾン低地に入植した先住民族の農民たちが一九七七年に結成した協同組合である。カカオの生産、加工、出荷を協同化することにより、経営を合理化し市場競争力を着実に高めてきた。一九八〇年代からはココアやカカオ豆をヨーロッパのフェアトレード団体に輸出し、現在では、組合員数一二〇〇余り、年間一〇〇〇トンほどのカカオを生産する企業に成長している。

エル・セイボの足跡を振り返ると、フェアトレードの役割がよくわかる。第一に、フェアトレードは、生産者自身の自律的な発展をサポートする協役にすぎないという点である。外部から技術や制度をもち込んで、それを定着させようとする開発援助とは異なる。組合員にとって重要なのは、フェアトレードのルールよりも、自分たちで築いてきた協同組合の規則なのだ。逆にいえば、着実な組織基盤のないところに、フェアトレードの便宜だけをもち込んで、大した効果はあらわれないのかもしれない。第二に、経済的安定は、独自の文化的発展を可能にするという点である。例として「カカオ・フェスティバル」というイベントを挙げておこう。エル・セイボを構成する五〇近くの生産者グループそれ

レスを手にとって、技法を比較することもできる。

店のところどころに生産者のポスターが飾られており、店員に尋ねれば、さらに詳しいことも教えてもらえるようだ。さながら街の民族学博物館といった印象だ。しかもこの楽しさは、当然ながら、展示品を実際に購入できることだ。本物の博物館ではそうはいかない。

なぜ丁寧に生産地の情報を提供しているのか。それは、この店が、生産者の支援を目的とするフェアトレード（公正な貿易）をおこなっているからである。生産者が安定した所得をえられるように適正な買値と価格を設定し、最大五〇パーセントまで代金を前払いする。長期にわたり、直接的な取引をこころがけ、生産者の技術向上にも努めているという。生産者の顔が見える商品をアピールすることで、消費者の関心を引きつけようとしているのだ。

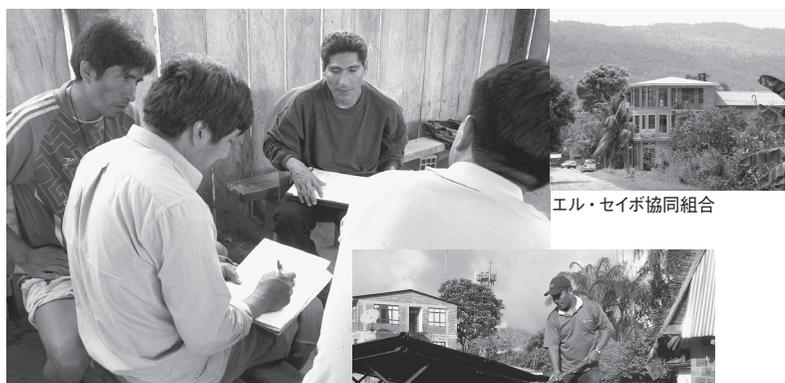
それが、工夫を凝らした芸能を披露する。組合員の世代交代が進むなか、文化も少しずつ変化する。四年に一度開催されるこのイベントでは、いわばアマゾン化されたアンデス先住民族文化のユニークなパフォーマンスが繰り広げられる。

利益の社会還元

商いの目的は、物売って利益をあげることである。通常、商いは生産者・商人・消費者の三者間で成立する。商人は、生産者と消費者のあいだで、仕入れ値と売り値の差額を大きくしようと試みる。自由貿易が進展すれば、グローバルな市場競争が熾烈化し、商人は生き残りをかけて利益の確保に奔走することになる。この結果、立場の弱い生産者の収入が圧縮されたり、宣伝に惑わされた消費者が高い買い物強いられることにもなりかねない。しかし今、それとは違った発想でグローバルな商いを試みる動きが出てきている。利益を最大化するのではなく、利益の一部を社会に還元する発想だ。これにはいろいろなやり方がある。フェアトレードはそれを生産者に投資して、生産者の福祉向上を図ろうとする方法だ。この方法で、伝統的な生産技術を再興したり、環境保全を進めることも可能である。他方、社会的に困窮している人や消費者一般に利益を還元する場合もある。災害復興などの場面で力を発揮するのは、企業のこうした善意である。本コーナー「多文化をあきなう」で伝えていきたいのは、商いを基本としつつも、単に営利追求にはとまらぬ多様な「あきない」の姿であり、それによって育っていく文化の面白さである。



ボリビアの首都ラパス市郊外にあるエル・セイボのチョコレート工場



エル・セイボ協同組合

組合員に小規模融資のしくみを説明するエル・セイボ職員



カカオを乾燥させる作業

スイスで売られているエル・セイボのカカオを使用したフェアトレード・チョコレート



フェアトレードショップ店内の生産者ポスター



シカゴ近郊のフェアトレードショップ(右、上)



フェアトレードショップで販売されているコンゴの仮面

新年が年に四回 やつてくる

一月一日、日本の新年。
初詣に出かける人、家でゆっくり過ごす人、休日を活かして海外へ旅行する人。
日本国内でも新年の迎え方はさまざま。
そして、歴史も文化も異なる異国の地では、人びとはどのように新年を迎えるのだろうか。
さまざまな民族を抱える東南アジアのある国について見てみよう。

一月なので、新年の祝日について書こうと思う。それも一年三六五日の内に新年の祝日が四回やつてくる国について。新年が次々にめぐってくる。それぞれが国の祝日なので職場も学校も休みになる。日本もこうだったら良いのになと、つい思ってしまう。インドネシアの話である。

西暦の新年

インドネシアでも普段の生活は西暦の暦に従って進行しており、日本と同じくカレンダーは西暦の一月一日からはじまる。この日は「キリスト

暦新年」の祝日である。インドネシア語で「マセイの新年」とよばれるが、マセイとはメシア、救世主すなわちキリストのことである。「国際的
新年」「太陽暦新年」などともいう。特に伝統的行事があるわけではないが、首都ジャカルタのような大都市では、大晦日の晩に人びとが街頭にくり出して大騒ぎし、午前零時に年が変わると花火が次々に上がり、みんなてんでに紙製のラッパをブーブー吹き鳴らす。一方、地方で暮らす人を見ていると、この日が休日となる学校生徒・勤め人を除けば、特に祝日の雰囲気はない。

中華新年

これから紹介する三つの新年はそれぞれの暦に従っており、西暦の特定の日に固定されてはいない。ここからは西暦二〇一二年の例で話を続けよう。一月三日には太陰暦の新年がやってくる。日本で旧暦といわれる月の満ち欠けに従う暦の新年であり、日本ではほとんど忘れられているが、韓国、中国、ベトナムでは長い休暇を伴う盛大な祝日となっている。インドネシアでこれを「イムレク新年」とよぶのは、中国南方方言の「陰暦」からきたことだからだ。また「中華新年」

や若者が混じっていたりする。

バリ人の新年

三月二三日はバリ人の新年である。バリでは何種類もの異なる暦が平行し絡み合っており、日本人にはとてもややこしく見えるのだが、そのなかでインド起源の太陽暦であるサカ暦新年に当たるこの日は「ニユピ、静寂の日」とよばれる。その前日の夕方には方々で爆竹が鳴り、子どもたちは鳴り物を鳴らして練り歩く。だが日が沈むとともに人びとは家で明かりを消して閉じこもる。二日目の朝まで、労働、火を使う炊事、外出は禁止である。交通が止まり、店も食堂も閉まるので、知らずにこの日バリを訪れた旅人は苦労することになる。バリ人が多数まとまって暮らしているのはバリ島と東隣のロンボク島西部なので、それ以外の地域のバリ人でない住民には、国の祝日だという以外あまり意識されずに過ぎてしまう新年である。

イスラムの新年

一月二五日はイスラム暦の新年にあたる。西暦の二〇一二年なら「ヒジュラ一四三三年新年」とよばれる。ジャワでは「スロ月一日」とよばれることも多い。アラビア語でイスラム暦一月はムハッラム月というが、ジャワ人、特に年配の

人びとはスロ月というジャワ・イスラム暦の用語に慣れている。イスラムにおいて暦のうえの重要な祝日はイスラム暦第一〇月の「断食明け大祭」と第二月の「犠牲祭」であり、一月一日は特に重要視されない。この日は、イスラム暦の新年だという以上に、ジャワ神祕主義者たちにとって重要な日である。一般にクバティナンとよばれるジャワ神祕主義とは、イスラム神祕主義が強くジャワ化し、近代西欧の神智学にも影響を受けた信仰であり、個人の瞑想・修行を重視する。信者たちはこの日、前夜から聖山ラウ山に登って滝に打たれたり、一晩中、川の水につかかって瞑想したり、あるいはもつと手軽に自室にこもり食や睡眠を断って瞑想をする。

新年が何度もやってくる国は、特に珍しいわけではない。多民族・多宗教の共存を建前とする国では、そうなるのがむしろ当然だろう。それにしても、インドネシアに一年間暮らし、次々にやつてくる新年を経験すると、「あれよ、あれよ」と思ってしまう。それぞれの民族や宗教ごとに自分たちの新年を祝うにとどまらず、四つの新年を全部国の祝日にしてしまい、少なくとも理論上は他の民族や他宗教の信者も巻き込んでしまったのは秀抜なアイデアだと思う。だが、インドネシアの国内でも国の祝日から漏れ無視されているさらに別の新年が、まだまだあるかもしれない。



中華新年の期間を締めくくる元宵節 (Cap Go Meh) のイベント。シンカワン市 西カリマンタン州 (撮影・津田浩司)

大衆の所在 「真正なエジプト人」とは

あいしま はつき
相島 葉月
民博 機関研究員

2011年5月27日にタハリール広場でおこなわれた「怒りの金曜」デモ



1月25日革命を記念して発売された大人気シール。車のナンバープレートに模したデザインで、「エジプト：1月25日」、縁どりは「シャアブ・ミスル（エジプトの人びと）」と書かれている

団結のキーワード

二〇一〇年末にチュニジアの青年が県庁舎の前で焼身自殺を図ったとき、これが「アラブの春」の幕開けになると、誰が予想できたろう。二六歳の不遇の死は多くの若者の共感を呼び、抗議デモが始まってわずか一〇日で政権が崩壊した。同じ北アフリカに位置する小国の民衆の勝利はエジプト国民を勇気づけ、二〇一一年一月二五日に首都カイロ中心部にあるタハリール広場にて大規模な反政府デモがおこなわれた。冬の夜空の下、人びとが「アツシャアブ・ユリッド・イスカート・ニザーム（人びとは政権崩壊を望んでいる）」と叫ぶ様子は、世代や社会階層、宗教の差異を超越したエジプトのシャアブの団結を象徴していた。「シャアブ」はアラビア語で「大衆」や「人民」を意味する。階級社会であるエジプトにおいて、一般的にシャアブは中間層より下の社会階層出身者を指すが、政治的な場面では幅広い階層の人びとを含み、動員するためのキーワードとなる。

空手から見えるエジプト社会

二〇一一年五月に筆者はカイロ国際空港に降り立った。空手家コミュニティについて調査するための訪問だが、革命後のエジプトの様子を見ておきたいという気持ちが強かった。この滞りでは、元アラブ・チャンピオンが中心に指導する空手教室で調査をおこなった。カイロの高級住宅街にあり、上流階級出身者でなければ会員になることの難しい有名なスポーツクラブである。エジプトは中東・アフリカ地域を代表する空手大国だ。一般的なスポーツは上流階級でなければ始めるのが難しいものの、設備投資があまり必要でない空手は、幅広い社会階層の子どものお稽古事として絶大な人気を博している。子どもを空手教室に通わせる理由を父兄に聞くと、「子どもの集中力を高めるのに効果的だから」などと答えるが、上流階級の場合、子育てに手を焼く親が、空手の先生なら我が子を厳しくしつけてくれるのではと期待して稽古に連れて来ることが多い。

ここはまったくシャアビーじゃない

調査の最終日に、エジプトの私営テレビ局がこの空手教室の取材に来た。子どもたちはめずらしく空手着に身を包み、父兄はより華やかな服装で稽古場に登場した。隣で見学していた先生に筆者のプロジェクトについて聞かれ、「大衆文化について関心があるため、空手の調査をしている」と答えたら、先生は少々戸惑った様子で「じゃあ何でこのクラブに来たの？ 確かに空手はシャアブ（大衆）のスポーツだけど、ここはまったくシャアビー（大衆的）じゃない」といった。上流階級社会を大衆の周縁に位置づけたその発言は、真正なエジプト人であるシャアブとは、既得権益に依存せずに、汗を流して働く中間層のことだといっているように聞こえた。タハリール広場とともにシャアブの要求を叫んだ日々は、真冬の夜の夢だったのだろうか。

このころ、多くのカイロ市民は、九月の国政選挙に向けて新政党が乱立する様子を見て「これなら八〇〇万党（エジプトの人口）できてもおかしくないね」と皮肉っていた。多事争論の末、一月末に議会選挙が実施されたが、大統領選挙の日程は依然として未定である。「シャアブ」はときにはエジプト国民を団結させ、分断する。この語の重層的な意味合いこそが、ポスト・ムバラク体制を模索するエジプト政治を面白くも、難しくもする。



上流階級出身者向けスポーツクラブの空手教室の入会案内ポスター

上級クラス（型の演武）：全国大会出場を目指して稽古中。女生徒は髪の毛をスカーフで覆っている



テレビ局のインタビューに答えるアーテフ・アバーザ師範（元アラブ・チャンピオン）。テレビ局の依頼で、子どもたちもこの日だけは空手着で稽古

五月とはいえずに四〇度に迫る暑さのなかで、先生方の熱意に反して子どもたちの集中力は続かない。先生が怒声を上げても数分後には同じ間違いを繰り返す。稽古場の周りにずらりと座った父兄の様子から、いかに裕福な家庭で育ったかがうかがい知れる。一方、多くの先生方は中間層や低所得者層の出身で、空手の実力により財をなし、「一流スポーツクラブ」や「ナショナルチームのトレーナー」となるまでの成功を取めた人たちである。公務員の月収が五〇〇ポンド（約七〇〇〇円）程度のエジプトにおいて、先生方が着用する純正品のエアデュークスやナイキのウェアは成功の証だが、上流階級の子どもたちにとっては普段着だ。稽古場に通う日々を重ねるにつれ、甘やかされて育った生徒たちの扱い方に困惑する先生方の愚痴を聞くようになった。「お遊びと真剣勝負を一緒にすることはできないよ！」「前に教えていたクラブでは四〇人生徒がいたら、七〜八人は全国大会に出場できるレベルまで鍛えることができたけど、このクラブでは一人しかない」空手道一筋の先生方と何不自由なく暮らしている上流階級の子どもや父兄の人生観の違いは大きい。「民衆」を主体とした反政府デモの結果ムバラク政権が崩壊したとはいえ、ニザーム（社会制度）を変えるのは容易ではない現実が垣間見えた瞬間だった。

1月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

※「たっぷりアメリカ—春のみんぱくフォーラム2012」期間中はアメリカにまつわるお話をお願いします。

8日
(100日)

話者：鈴木七美（国立民族学博物館 教授）

話題：アーミッシュ・キルトの世界

場所：本館展示場内ナビひろば

15日
(100日)

話者：山本紀夫（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：世界を変えた栽培植物

場所：本館展示場内ナビひろば

22日
(100日)

話者：齋藤晃（国立民族学博物館 准教授）

話題：チュルカナスのやきもの

場所：アメリカ展示場

29日
(100日)

話者：八杉佳穂（国立民族学博物館 教授）

話題：アステカの暦

場所：アメリカ展示場

1年間みんぱくに何度でも入館できる 「みんぱくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

編集後記

人も馬齢をかさねると「一年ははやいですね」は日常あいさつ程度の意味しかないが、もう年始の干支特集号の出番となった。干支といえば、いままで気になっていることがひとつあった。今回の干支のたつのことだが、なぜ竜や龍とならんで辰の文字がつかわれるのだろうか。そういえば他の十二支も申（さる）にしろ日（へび）にしろ、ひとつとして動物の漢字ではない。調べてみると、十二支は古代中国で十二年の循環を生物の成長の輪廻にたとえたもので、辰は息吹こうとする命の躍動などを示したとのこと。覚えやすいように竜を当てただけで、本来そんな意味はない。ちょっとの時間でわかること、この歳までほうっておいた自分を少し反省した次第。

今月号からあらたなシリーズ「多文化をあきなう」が始まった。マイノリティの自立支援をめざし、彼らの文化を基軸にあえて商売としてグローバル経済と立ち向かおうとする市民運動をとりあげる。フェアトレードなど今後成長株の市民運動として注目していきたい。（庄司博史）

●表紙：祭礼用 船く早船（かんせん）>
地域 中国 標本番号 H0229874

次号の予告

特集

座談会 東日本大震災を考える（仮）

月刊みんぱく 2012年1月号

第36巻第1号通巻第412号 2012年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史（編集長） 樫永真佐夫 川口幸也

久保正敏 菅瀬晶子 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敏

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

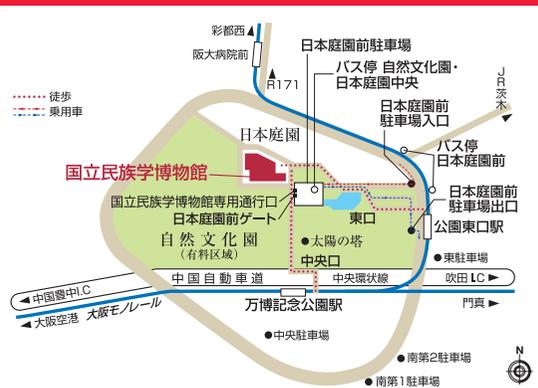
交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

